

(別紙)

成果の説明書

(氏名) 西野寿章	(学部) 地域政策学部
<p>1 重要事項</p> <p><b>【研究成果】</b></p> <p>(1) 図書(編著・執筆分担)</p> <p>1) 高崎経済大学地域科学研究所編(2021)『農業用水と地域再生—高崎市・長野堰の事例』, 日本経済評論社.(担当箇所:本書の視点, pp. 1-8, 「伝承」の検証(鈴木耕太郎と共著), pp. 46-84, 近世における西新波堰流域村の米作条件と堰の管理システム, pp. 85-99, 長野堰運営組織の近代化と経営, pp. 116-125, 戦後における高崎市の変容と長野堰, pp.133-146, 長野堰の歴史と地域づくりへの視点, pp. 147-155, 市街地を流れた長野堰の復元と地域資本整備手法の考察, pp. 160-165).</p> <p>2) 田林明・菊地俊夫・西野寿章・山本充編著(2021)『日本農業の存続・発展—地域農業の戦略—』, 農林統計協会(担当箇所:大規模野菜産地の維持要因, pp. 295-329, 山梨県甲府盆地における果樹農業の持続性(田林明・菊地俊夫と共著), pp. 205-237, 日本農業の存続・発展戦略と地域的条件(田林明・菊地俊夫と共著), pp. 351-382).</p> <p>3) 伊谷樹一・荒木美奈子・黒崎龍悟編(2021)『地域水力を考える』昭和堂, (担当箇所:地域・産業の電化過程と小水力発電, pp. 62-103).</p> <p>(2) 論文</p> <p>1) 西野寿章・鈴木耕太郎(2020)「長野堰の開削者と開削時期をめぐる一考察」, 産業研究(高崎経済大学地域科学研究所)56-1, pp. 16-37.</p> <p>(3) 研究ノート</p> <p>1) 西野寿章(2020)「田園回帰現象の山村への波及に関する一考察」, 産業研究(高崎経済大学地域科学研究所)56-1, pp. 38-52.</p> <p>(4) その他</p> <p>1) 西野寿章(2020)「山村における若者居住の現状と『田園回帰』」, 地理 781, pp. 20-27.</p> <p>2) 西野寿章(2020)「蚕糸業史にみる前橋と高崎」, 地図中心 577, pp. 28-29.</p> <p>3) 西野寿章(2021)「山村における観光振興の成立条件に関する一考察」, 観光科学研究(東京都立大学都市環境学部観光科学科)14, pp. 17-22.</p> <p>4) 西野寿章(2021)「高崎の商業発達史—高崎中心市街地の形成と変容をふまえて—」, 高崎経済大学ブックレット④.</p> <p>5) 長野堰研究報告書作成チーム(2021)「明治以降の長野堰と高崎—これからの地域づくりへの視点を考える—」, 高崎経済大学ブックレット⑤.(担当箇所:長野堰運営組織の近代化と経営, pp. 5-8 ほか).</p> <p>(5) 研究発表</p> <p>1) 西野寿章「日本の山村における地域電化と地域社会, 住民の対応」, 京都大学経済学研究科・再生可能エネルギー講座シンポジウム(2020. 12. 14 オンライン).</p> <p><b>【学外研究費獲得状況】</b></p> <p>1) 科学研究費基盤研究(B)「現代山村のレジリエンス」(平成 30~33 年度, 研究代表者・奈良大学文学部・岡橋秀典教授).</p> <p>2) 科学研究費基盤研究(B)「集团的林野経営の地域的機能分析と地域振興政策への応用可能性に関する研究」(平成 30~32 年度, 研究代表者・明治大学商学部・中川秀一教授).</p> <p><b>【教育成果】</b></p> <p><b>【学部講義】</b> 担当講義科目の3科目は, オンラインにより実施した. オンライン授業には多様な</p>	

スタイルがあるが、担当講義科目については、時間割通りのライブ授業とした。受講生の顔が見えない授業は難しい面があり、気持ちが通じにくく、学生からの苦情を聞くこととなったが、教室での授業と同様に、講義中になるべく多くの学生に質問をして答えさせた。これにより授業には一定の緊張感が保持できたと考えている。

【学部演習】3・4年生の演習授業も、前期はオンラインにより行った。毎年、フィールド調査を行って、研究成果をまとめてきた3年生については、高崎中心市街地の研究を進め、夏休み期間中に訪問先のご理解を得た上で、古くから商売をされてきた老舗4店舗を3～4人に分けて、班ごとに聞き取り調査に出かけた。対面となった後期授業では、人口班、産業班、類似都市比較班に分けて、高崎中心市街地の1980年以降の変化について分析を進めた。研究結果の一部は、高崎経済大学ブックレット④に収録した。2020年度3年生の研究成果は、2021年度3年生が実施する群馬県の山間集落調査結果と合本して、『限界化の進む地方のマチとムラー都市中心市街地と山間集落の現状を考える』として、西野ゼミナール29冊目となる最後の研究成果報告書として2022年3月にまとめる予定である。

【大学院】修士課程演習生1名、博士課程2名在籍。修士論文、博士論文の作成に向けて、適宜指導を行い、博士課程1人は群馬地理学会において、高崎五万石騒動研究への新たな視点について研究発表を行い、専門誌への投稿の準備を進めている。

【社会的活動】2020年度に学外で担当した公表可能な委員、社会的活動は次の通りである。

【学会関係】群馬地理学会理事、東京地学協会、経済地理学会の委員など

【行政関係】1)群馬県ぐんま緑の県民税評価検証委員会委員長、2)群馬県公共事業再評価委員会委員、3)群馬県森林・緑整備基金評議員、4)群馬県埋蔵文化財調査事業団評議員、5)高崎市市有林管理委員会副委員長、6)高崎市・信越本線活性化協議会委員、7)群馬県過疎有識者会議座長ほか。

## 2 その他の事項

・2015年度から2020年度までの6年間、地域科学研究所所長を務めた。大学の地域貢献が求められる中、これまでの活動実績を踏まえて、基礎研究ならびに市民、県民向けの各種生涯学習事業をさらに整備した。地域科学研究所のベースは整備されたと考えているが、事業内容については、角度を変えてアプローチし、さらに充実を図っていただきたい。

## 3 次年度以降の計画・抱負

### 【研究】

- ・定年まで2年となり、研究のまとめに取り組みたい。2021年度は、研究分担者となっている科学研究費研究「集团的林野経営の地域的機能分析と地域振興政策への応用可能性に関する研究」の研究期間が1年間延長されたことから、現地調査を続けてきた兵庫県の生産森林組合の地域的機能分析を行い、研究のまとめを行いたい。
- ・もう一つの科学研究費研究「山村のレジリエンス」も最終年を迎えた。山村の経済的基盤形成を農業に求め、山間集落の維持条件について考察したい。

### 【教育】

- ・学部講義科目については、受講生の理解度が年々低下していると感じている。理解度を高めるための工夫を担当講義について考えたい。
- ・2021年度の演習Iは、限界化が著しい群馬県南西部の山村において、コロナ感染対策に留意しながら、現地の理解を得て、山間集落の調査を実施する。研究成果は、2020年度演習I生の高崎中心市街地研究成果と合わせて、前述した調査報告書をまとめる予定である。この報告書は、1992年以来続けてきた西野ゼミナールの最後の報告書となる。
- ・大学院博士後期課程2名の演習生に対しては、引き続き博士論文作成に向けての指導を行い、一定の目処を立てたい。